

「情報統合に対する日立の取り組み」

情報資産の散在が企業戦略実現の妨げに

企業活動とITが深く結びついた現在、ITシステムにはビジネスの変化に対し、柔軟に適応することが求められています。そこで、環境変化に即応した企業戦略の立案や、迅速で正確な業務実行、増え続けるセキュリティリスクなどへ対応するためには、SOA(Service Oriented Architecture)に基づき全体最適化された変化に強いITシステムを構築することが重要です。

日立はこうしたニーズに応えるため、既存資産を含めた業務システムを、「インタフェース」「プロセス」「情報」という3つの階層で統合するアプローチを提唱しています。

なかでも、業務に必要な情報を、必要なときに提供する「情報統合」は、SOAの柔軟性を最大限に活かし、企業全体における情報の有効活用と統制を進めるためにも必要不可欠な要素といえるでしょう。

いま企業内には、個別に最適化された業務システムごとにデータベースが構築されているため、似て非なる情報が散在したり、二次情報が増殖するといった問題がおきています。このため最新情報の的確な把握が困難になり、現場の情報が経営に伝わらない、経営の判断が現場にフィードバックされない、システム間の連携を進められないといった、さまざまな課題が発生しています。

日立はこれらの課題を解決するため、SOAに基づいたシステム構築全般を支援するCosminexusの中で、HiRDBやDocumentBroker、DataStage、QualityStageといった実績豊富なオープンモルウェア製品および各種コンサルテーションやソリューションを提供しています。業務システムを横断したデータの「収集」「加工」「活用」を実現し、必要な情報にJust-in-Timeにアクセスできる情報統合基盤の構築を支援します。

新たな価値を創造するフィードバックループを実現

経営と現場の多様な情報を「収集」し、整合性のとれた価値ある情報へと「加工」して、いつでもどこからでも情報を「活用」できる情報統合基盤を構築することにより、お客さまは、変化への即応と、経営と現場をつないだ価値を創造するフィードバックループを実現することができます。現場と直結した経営の実現、意思決定の迅速化、コンプライアンスの確立など、経営に計り知れないメリットを生み出す

ことが可能となるのです。

また情報統合は、SOAに基づくITシステムの全体最適化や、企業合併における迅速なシステム統合といった大規模なシステム改革を支えるだけでなく、企業に散在する多種多様な価値あるデータを特定アプリケーションから解放し、新しい業務システムやサービスからも柔軟に活用できるソリューションとしても有効な手段といえるでしょう。

こうした幅広い情報統合ニーズにお応えするため、日立はその中核を担うデータベース基盤の継続的な強化を図っています。従来より定評のある高信頼・ノンストップ運用やコンプライアンスへの対応をさらに強化し、各システムに散在する情報を仮想化し、鮮度に合わせた供給が行えるフェデレーション/レプリケーション/ETL機能や、柔軟性の高いXMLデータをそのまま利用できるなどの機能を新たに提供しました。今後も、加速度的に増える情報の高速処理や、業務効率の向上を図るマスターデータの統合管理など、企業戦略に役立つ情報をJust-in-Timeに提供するためのさまざまな強化策を予定しています。

ダイナミックに変化し続ける経営環境のもと、既存の情報資産を有効活用しながら、価値ある情報をスピーディに引き出し、企業競争力の強化へとつなげていくには、信頼性と柔軟性に優れた情報統合基盤が必要です。お客さまの経営スピード向上とビジネスの継続的な発展を支援するため、これからも日立は付加価値の高い情報統合を実現するための各種オープンモルウェア製品の強化を計り、全体最適化されたITシステムの構築を実現する統合システム構築基盤を提供していきます。どうぞご期待ください。

フェデレーション:異なるデータソースを仮想化することでリアルタイムにデータフィードする方法。
レプリケーション:データソースを非同期に複製することで負荷を分散しつつ鮮度の高いデータを利用できる方法。
ETL(Extract, Transform and Load):データソースからバッチ処理でデータを抽出し、柔軟に加工・変換して利用できる方法。



図 情報統合の位置付け